2025 年 3 月 29 日掲載

男女共同参画
参画ゼミ

多様な性と性的マイノリティ
～朝ドラ『虎に翼』の考証をして～

福島大学准教授
前川　直哉

●性的マイノリティとマジョリティ

近年、「LGBT」や「性的マイノリティ」という言葉を新聞やテレビなどでも目にする機会が増えてきました。「性的マイノリティ」とは、何らかの意味で性のあり方が、社会の多数派（マジョリティ）とは異なる人々を指す総称です。

代表的なカテゴリーとして、以下のようなものがあります。

・レズビアン（L）：女性同性愛者
・ゲイ（G）：男性同性愛者
・バイセクシュアル（B）：両性愛者
・トランスジェンダー（T）：出生時に割り当てられた性別と性自認が異なる人

「LGBT」は、これらのカテゴリーの頭文字をとったものです。この「LGBT」の語などで、性的マイノリティ全般を表すこともあります。実際にはこの他にも、

・アセクシュアル：他者に対する性的関心を持たない人
・クエスチョニング：自分の性のあり方が分からない、決められない、決めたくない人

なども性的マイノリティです。

トランスジェンダーに関して、「出生時に割り当てられた性別」という、少し聞き慣れない言葉が出てきました。普段あまり意識することはないかもしれませんが、私たちの性別は多くの場合、自分で選んだ性別ではありません。生まれた時に、お医者さんや看護師さん、助産師さんなどに「女の子ですよ」「男の子ですよ」と言われ、多くの場合は家族がそれを役所に届け出て、女性、男性という性別が割り当てられます。大多数の人は、その割り当てられた性別に――時には「この性別で損したな」などとは感じるかもしれませんが――大きな違和感なく、一生を過ごします。しかし数は少ないですが、自分の認識する性別（性自認、ジェンダー・アイデンティティ）と、この「出生時に割り当てられた性別」が異なる人が一定数存在します。こうした人びとをトランスジェンダーと呼びます。

ところで、性のあり方における多数派、つまり性的マジョリティは何と呼ぶのでしょうか。「普通」？「ノーマル」？　それだと、まるで性的マイノリティが「普通ではない人」のように聞こえてしまいますね。そもそも、人を「普通」と「普通でない」に分ける行為そのものに、ある種の力（権力）が働いているとも言えそうです。

多くの人が属する「性的マジョリティ」にも名称があります。

・ヘテロセクシュアル（異性愛者）
・シスジェンダー（出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している人）

先ほど挙げたレズビアン、ゲイなど「性的マイノリティ」を指す言葉は、かなり広く知られるようになってきました。一方、数が多いはずの「ヘテロセクシュアル」「シスジェンダー」は、ま

だまだ知られていないのが実情です。私がふだん大学で授業をしている時も、LGBT など性的マイノリティに関する言葉は多くの学生が知っていますが、「ヘテロセクシュアル」「シスジェンダー」という語を知っている学生は少ないです。

ここにはやはり、非対称な関係性があると私は考えます。マイノリティは名付けられ、しるしづけられるのに（これを「有徴化」と言います)、マジョリティは「普通」であるとしてしるしづけられない（無徴化)。例えば、秘密が守られるとても安全な場で、互いに自分の性のあり方について話し合う空間があったとします。それぞれ「私はレズビアンです」「私はトランスジェンダー男性（出生時には女性と割り当てられたが、性自認は男性である人）です」といった具合に自己紹介している中で、マジョリティの人が「私は『普通』です」「『ノーマル』です」と言ったら、と想像してみてください。何だかおかしな空気になりますよね。ここで、「私はヘテロセクシュアルの、シスジェンダー女性です」といった風に言うことで、初めて少し対等な関係に近づけるのではないか。私はそんな風に考えています。

●性のグラデーション

日本には戸籍制度がありますので、日本国籍を有する人は戸籍上の性別として女性・男性のいずれかに分けられます。しかし実際には、性のあり方はもっとずっと多様です。性を構成する要素としては、身体の性、性表現、性自認、性的指向の 4 つがよく用いられます。そしてこれらはいずれも女性・男性のどちらかにパキッと二分されるものではなく、連続的なもの、あるいはスペクトラム状のもので、グラデーションがあります。

身体の性とは、その名の通り身体的な特徴により分けられる性のあり方です。例えば保健の授業などで「第二次性徴をむかえると、男性は背が高くなり、体毛が濃くなり、変声期を経て声が低くなって……」というように学んだ方もおられるでしょう。しかし実際にはこうした身体的特徴は個人差がかなり大きいです。身長の高い女性も、体毛の薄い男性も、声の高い男性も、たくさんいます。外性器や内性器、あるいは性染色体のあり方も、実際には様々であり、例えば典型的な男性の性器や女性の性器とは異なる人も一定数います。

性表現とは、一言でいうと「見た目の性別」のことです。髪型や服装、メイク、アクセサリーなどのほか、仕草や言葉遣いを含むこともあります。これも典型的に女性的な見た目、男性的な見た目というのもありますが（そもそも何をもって女性的・男性的とするかは、時代や文化によって大きく異なりますが)、例えば最近の大学生の一般的な服装の多くは、男女どちらと分けられないユニセックスなものです。見た目の性別もグラデーションがあり、両端つまり典型的な女性・男性ではなく、その中間のどこかに位置する人が多いのが実際のところです。

性自認は、ジェンダー・アイデンティティの訳語で、性同一性とも呼ばれます。自身の性をどのように認識しているかを指します。「心の性」といった表現が用いられることもありますが、私個人としてはこの表現はあまり正確ではないと感じています。というのも、「心の性」というと、「自分は男性だと思っている」「自分は女性だと思っている」のように、「思っている」といったニュアンスが入ることもあるためです。あなたの性別は？と尋ねられた場合、おそらくほとんどの人は「女性だと思います」「男性だと思います」とは答えず、「私は女性です」「男性です」などと答えることでしょう。その「私は女性です」「男性です」というのが、その人の性についてのアイデンティティ、すなわち性自認です。性自認が女性の人、男性の人もいれば、どちらでもない

という人、そもそも性別を男女の二つに分ける二分法が自分にはしっくりこないという人など、これも様々なあり方が存在します。

性的指向は、自身の性的な関心や欲求の対象となる性別のことです。これもグラデーションがあり、男性だけが好きな人、女性だけが好きな人もいれば、好きになれば性別は関係ないという人、基本的には男性が好きだけれど女性を好きになったこともある人、他者に性的な関心が向かないアセクシュアルの人など、性的指向のあり方も千差万別です。

このように、性別と一言でいっても、その構成要素は身体の性、性表現、性自認、性的指向などがあり、またそれぞれがグラデーション状になっています。これらの組み合わせは人によって本当に多様であり、実際には人の数だけ性のあり方が存在するといっても過言ではないほどです。

一方、現在の日本社会には、性に関する 2 つの虚構（フィクション）が存在しています。一つは「人の性別は男・女の 2 つのみで、みんな出生時に割り当てられた性別のまま生きる」という「性別二分法」。もう一つは「人はみんな、異性を好きになる」という「異性愛規範」です。

ここまで見てきた通り、実際には性のあり方は多様であり、性別二分法と異性愛規範は現実とは異なる虚構、フィクションです。しかし日本の法律や制度は、これらのフィクションを前提に作られているため、その枠に収まらない性的マイノリティの権利が十分に保障されていないのです。また、こうしたフィクションが日本社会を覆い、法や制度の前提となっていることは、性的マイノリティに対する差別・偏見の原因にもなっています。

執筆者　　前川　直哉

福島大学教育推進機構准教授、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長。
1977 年、兵庫県尼崎市生まれ。灘高 3 年在学時に阪神・淡路大震災で被災。灘中・高教諭を経て 2014 年に福島市に転居し「ふくしま学びのネットワーク」を設立。
2018 年より福島大学教員。専門は教育学・社会学（ジェンダー／セクシュアリティ）。著書に『〈男性同性愛者〉の社会史』（作品社）、『「地方」と性的マイノリティ』（共著、青弓社）など。

掲載 ： 2025 年 3 月 29 日

このゼミは「フレンテみえ」ホームページで公開しています。 フレンテみえ 検索 クリック

MIE PREFECTURE GENDER EQUALITY CENTER
三重県男女共同参画センター フレンテみえ

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234
TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135
E-mail:frente@center-mie.or.jp URL:https://www.center-mie.or.jp/frente/

2025 年 3 月 29 日掲載

男女共同参画
参画ゼミ

多様な性と性的マイノリティ
～朝ドラ『虎に翼』の考証をして～　その２

福島大学准教授
前川　直哉

●日本の現状と課題

日本において、性的マイノリティの存在はようやく広く認識されつつありますが、依然として社会的な課題も多く残っています。

性的マイノリティの人口比については国内外で様々な調査がなされていますが、数%から 10%程度であろうと考えられています。つまり学校のどのクラスにも、あるいはどの職場にも、性的マイノリティは何人かいます（もちろん、誰が性的マイノリティなのかを炙り出そうとするような行為はプライバシーの重大な侵害ですので、してはいけません）。

しかし、日常生活の多くの場面において、性的マイノリティは「いないこと」にされているのが現状です。例えば親しい友人に対する「彼氏いるの？」「彼女いるの？」という質問。女性に「彼氏いるの？」と尋ね、男性に「彼女いるの？」と尋ねるというのは、相手を異性愛者であると勝手に決めつけていることになります。学校の授業中に、先生が「将来君たちが結婚して子どもができたら……」と生徒たちに語りかけている時、その「君たち」の中に同性愛者などの性的マイノリティは想定されていません。アンケートに答えようしたら最初の性別欄が「男性・女性」の 2 択しかなくて、そこで回答するのをやめたという性的マイノリティもいます。マジョリティ側は気づきにくい日常生活の様々な場面で、性的マイノリティは「いないこと」にされているのです。

近年、日本では自治体によるパートナーシップ認定制度が広がっています。ただしパートナーシップ認定制度は結婚とは異なり、法的な効力が存在しません。G7 といわれるサミット参加国のうち、同性同士の結婚（同性婚）を認めていないのは日本だけです。新聞の世論調査などでは同性同士の結婚を認めるべきだという意見が多数を占め、また全国で行われている裁判でも同性婚を認めない民法などの規定を「違憲」とする判決が相次いでいます。しかし残念ながら、国会で同性婚を導入するための本格的な議論が行われている状況には至っていません。

性的マイノリティは「新しい権利」を求めていると勘違いされることもありますが、そうではありません。実際には、性的マイノリティは人権の一部を制限されてしまっているのです。人権とは、全ての人が生まれながらにして有する権利を指します。例えば、互いに愛しあっている相手と結婚する権利。あるいは、自身の性自認にあった制服を着て学校に通う権利。そんな基本的な人権を、性的マイノリティは制限されてしまっているのです。性的マイノリティは決して何か新しい権利を要求しているわけではなく、不当に奪われている人権を取り戻そうとしているのだと理解して頂きたいと思います。

●朝ドラ『虎に翼』の考証をして

2024 年度上半期の NHK・朝の連続テレビ小説『虎に翼』で、私はジェンダー・セクシュアリティ考証を担当しました。多くの視聴者の記憶に残る、素晴らしいドラマに関わらせていただく

ことができ、本当に光栄に思っています。
『虎に翼』は朝ドラ 110 作目になりますが、「ジェンダー・セクシュアリティ考証」というのは、おそらく初めての肩書きだったのではないかと思います。具体的には、毎週送られてくる台本に事前に何度も目を通し、ジェンダーやセクシュアリティの観点から確認するという仕事です。
中心となったのは、伊藤沙莉さん演じる主人公・猪爪寅子の友人である轟太一のセクシュアリティについてです。彼が同性愛者であるという設定は、かなり早い段階から決まっていたようで、私にも放送開始のずいぶん前からお声掛けをいただいていました。私は『<男性同性愛者>の社会史』（作品社）という本を著し、大正期から戦後に至るまでの日本の「男性同性愛」の歴史について検証していたため、当時の男性同性愛について詳しいということで声が掛かったのだと思います。『虎に翼』では他にも、日本のトランスジェンダー史の第一人者である三橋順子さんも、トランスジェンダー考証として協力しておられます。
考証の際、私が注目したポイントは大きく分けて二つです。一つ目は、作品が描く時代において不自然な描写がないか。二つ目は、性的マイノリティをはじめ、差別を受けている当事者を傷つけるような表現になっていないかどうか、という点です。この二点を中心に、轟の登場回だけではなく、全ての回の脚本にじっくりと目を通しました。今振り返っても、毎週台本が届くのを心待ちにする、とても楽しいお仕事でした。
実際に台本を読み始めてすぐに気づいたのですが、脚本家の吉田恵里香さんはとても緻密な取材を行ったうえで執筆なさっていて、ジェンダー史の観点から指摘する箇所はほとんどありませんでした。一例をあげると、第一週のエピソードで、寅子の母・はる（石田ゆり子さん）が熱心に見合いを勧めるシーンがあります。なぜ、はるは寅子に見合いをし、結婚して専業主婦になれと言うのか。作品の中では、はるが四国の旅館の娘として育ち、家業の存続のための結婚が準備されていたことが描かれています。はるはそうしたイエ制度に反発し、サラリーマンである直言（岡部たかしさん）と結婚し、専業主婦となります。この「サラリーマンと専業主婦」という組み合わせで、「男性は外で仕事、女性は内で家事・育児」にそれぞれ専念するという近代的な性別役割分業に基づく家族は、当時としては新しい生き方だったのです。
イエ制度を脱し、近代的な性別役割分業に基づく家族を形成したはるは、娘の幸福を願うからこそ、あそこまで寅子に見合いを強く勧めたといえます。一方、寅子はそうした性別役割分業に納得がいかず、見合いを忌避し、法律の道への一歩を踏み出すことになるのです。このように、吉田さんの脚本はジェンダー史の観点からもとても深い洞察に満ちたものでした。

執筆者　　前川　直哉

福島大学教育推進機構准教授、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長。
1977 年、兵庫県尼崎市生まれ。灘高 3 年在学時に阪神・淡路大震災で被災。灘中・高教諭を経て 2014 年に福島市に転居し「ふくしま学びのネットワーク」を設立。
2018 年より福島大学教員。専門は教育学・社会学（ジェンダー／セクシュアリティ）。著書に『〈男性同性愛者〉の社会史』（作品社）、『「地方」と性的マイノリティ』（共著、青弓社）など。

掲載 ： 2025 年 3 月 29 日

このゼミは「フレンテみえ」ホームページで公開しています。 フレンテみえ 検索 クリック

MIE PREFECTURE GENDER EQUALITY CENTER
三重県男女共同参画センター フレンテみえ

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234
TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135
E-mail:frente@center-mie.or.jp URL:https://www.center-mie.or.jp/frente/

2025 年 3 月 29 日掲載

男女共同参画
参画ゼミ

多様な性と性的マイノリティ
～朝ドラ『虎に翼』の考証をして～　その３

福島大学准教授
前川　直哉

●性的マイノリティを「いないこと」にしない

寅子の生きた時代から現代にまでつながる女性差別の問題を正面から扱った『虎に翼』は、朝鮮出身者への差別や性的マイノリティに対する差別なども取り上げました。性的マイノリティが抱える課題についてここまで踏み込んだ描写があったのは、朝ドラ 110 作目にして初めてではないでしょうか。その意味でも、『虎に翼』はたいへん画期的な作品だったと思います。

実際には存在していたにもかかわらず、朝ドラでは「いないこと」にされてきた性的マイノリティの存在に光を当てたのは、「透明化されてきた人たちを描きたい」という吉田恵里香さんの思いがあってのことだと思います。そしてこのテーマを真剣に扱うという姿勢は、俳優の皆さんの演技や、制作陣の皆さんの演出にも貫かれていました。

例えば 51 話で、終戦後、山田よねが轟に対して「惚れてたんだろ、花岡に」と尋ねるシーンがあります。決して無理に聞き出そうとするのではなく、自分の前では虚勢を張る必要はないと伝えるよね役の土居志央梨さんの演技も素晴らしかったですし、それを受けた轟役・戸塚純貴さんのモノローグには多くの視聴者が釘付けになったことでしょう。BGM なしの二人芝居で、轟を映すカメラはやや上から見下ろす形のハイアングル気味となっており、秘めていた思いを言葉にしようとする轟の苦悩が映し出されています。ほぼ 1 分間にわたり轟のアップで画面を固定し、途中でカメラを一切切り替えずに独白に耳を傾けさせる演出と戸塚さんの演技には圧倒されました。

100 話で事務所を訪れた寅子に対し、轟が遠藤時雄（和田正人さん）の手をしっかり握り、「いま、俺がお付き合いしているお方だ！」と告げるシーンも印象的でした。轟は明るくコミカルなキャラクターとしても描かれているため、ここも一つ間違えるとコメディタッチになりかねない場面だと思うのですが、BGM なしの静寂な空気を作り出し、轟の毅然とした態度を見事に描き出していました。寅子に告げる直前に轟が遠藤にアイコンタクトをしているシーンもあり、たとえ付き合っている同士でも無断で暴露するアウティングは行わないということも表現されています。性的マイノリティのテーマを真面目に扱うという姿勢が脚本・演技・演出の皆さんで共有されていたからこそ、こうした数々の素晴らしいシーンが出来上がったのだと思います。

このシーンに続き、寅子が自身の結婚について轟たちに相談する際に、無自覚に性的マイノリティを「いないこと」にしてしまっている場面もありました。私たちは「差別をしてはいけない」と教わっていますが、実は同時に「誰もがついうっかり、差別をしてしまうものだ」ということをあまり認識していません。差別は悪い人がするのではなく、知識や注意力の不足から、誰もがついうっかりしてしまうことです。ですから重要なのは、それに気付いたり、誰かに指摘されたりした時に、自身が差別をしていたと認め、それを改めていくことです。そうすることではじめて、世の中から少しずつ差別は減っていきます。「私が差別をするはずがない」と逆切れしていて

は、いつまで経っても差別はなくなりません。『虎に翼』では寅子が自身の過ちに気付き、轟たちに謝罪し、性的マイノリティについて当事者から学ぼうとする場面も描かれていました。改めて、すごい作品だと感じます。

●戦後日本と同性愛

轟が寅子に対し、同じ男性である遠藤と付き合っていることを告げたのは、劇中では昭和 30（1955）年の出来事です。

日本では大正期に同性愛という概念が輸入され、その直後から、当事者である男性たちが「自分は男性同性愛者だ」と名乗り、様々な苦悩を語る投稿が雑誌に掲載されました。戦時中は検閲などにより同性愛に関する表現が制限されましたが、戦後には再び様々な雑誌で取り上げられるようになりました。昭和 20 年代後半には、同性愛専門ではないものの男性同性愛の当事者に共感的な呼びかけをする雑誌や、男性同性愛を専門とする会員制の同人誌などのメディアも誕生しています。ただし、こうしたメディアを手に入れたのは男性同性愛者のみで、女性同性愛者が自身のメディアを手にするのはずっと後のことになります。同じ「同性愛者」という性的マイノリティであっても、そこにはジェンダーの非対称が存在していました。

『虎に翼』21 週は、「同性婚」と「夫婦別姓」という、現代に繋がる二つのテーマを同時進行で描いていました。星航一（岡田将生さん）との再婚を考えるものの姓の問題で悩む寅子と、愛し合っていても同性同士であるため結婚できない轟と遠藤の姿を同時に描くことで、「そもそも結婚とは何か」を深く掘り下げていく展開です。102 話の轟のセリフ、「この先の人生、お互いを支え合える保障が法的にない。俺らが死ねば、俺らの関係は、世の中からなかったものになる」という言葉は、今も多くの同性カップルが抱える苦悩を映し出していました。103 話で航一が告げた「寅子さんを妻だと紹介することは、世界中の人に『この人が僕の愛する人だ』と伝えることです」というセリフも印象的です。

中には『虎に翼』に対して、「現代の問題をドラマの世界に入れ込み過ぎだ」と批判する声もあったようです。しかし真に批判すべきは、寅子たちの時代の課題が今なお解決されずに残ってしまっていることではないでしょうか。私たちが『虎に翼』を観て、「そうそう、この頃は結婚すると別姓は選択できなかったし、同性婚もまだなかったんだよね」と言えないことこそが問題なのです。

今なお、姓の問題で悩んでいる女性も、同性婚が認められていないため結婚することができない同性カップルも、日本中にたくさんいます。同性婚裁判で違憲判決が相次いでいると先に述べましたが、そもそも愛する人と結婚するために裁判を起こさなければいけないという状態自体がおかしいと、私は考えます。次の世代の人たちが同じ苦しみを抱くことがないよう、少しでも時代を先に進めることが、私たちの世代の使命ではないでしょうか。

『虎に翼』からは多くのことを学びましたが、私が最も印象に残っているのは、寅子が恩師である穂高重親（小林薫さん）の退任記念祝賀会で、花束の贈呈を拒否したシーンです。本当は納得していないのに、その場を収めようと「大人の対応」をした結果、差別が温存されてしまう。そうしたケースは多々あります。私自身、そうした「花束」をたくさん渡してきてしまったと思います。

でも寅子は「納得できない花束は渡さない」と言い切る。たとえ相手が自分の恩師であり理解者であったとしても、きちんと伝えるべきことは伝える。そうしないと差別は温存され、次の世代にも同じ目に合わせてしまうからです。寅子の姿勢に学び、肩の上に小さな寅子をいつも置いて、目の前の差別と闘っていく。私は、その重要性をこの作品から学びました。

執筆者　　前川　直哉

福島大学教育推進機構准教授、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長。
1977 年、兵庫県尼崎市生まれ。灘高 3 年在学時に阪神・淡路大震災で被災。灘中・高教諭を経て 2014 年に福島市に転居し「ふくしま学びのネットワーク」を設立。
2018 年より福島大学教員。専門は教育学・社会学（ジェンダー／セクシュアリティ）。著書に『〈男性同性愛者〉の社会史』（作品社）、『「地方」と性的マイノリティ』（共著、青弓社）など。

掲載 ： 2025 年 3 月 29 日

このゼミは「フレンテみえ」ホームページで公開しています。 フレンテみえ 検索 クリック

MIE PREFECTURE GENDER EQUALITY CENTER
三重県男女共同参画センター フレンテみえ

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234
TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135
E-mail:frente@center-mie.or.jp URL:https://www.center-mie.or.jp/frente/